閉塞感に覆われる社会、活気あるリーダーへ育て

幻の応援歌20年経て復活

四日市高 開け「希望の門」

閉塞感に覆われる社会だが、希望を胸に、活気あるリーダーに育ってほしい――。創立112年の伝統校、県立四日市高校（四日市市）が、生徒の成長を願い、埋もれたままになっていた応援歌を復活させた。

復活した応援歌は「希望の門」。同校出身の小説家、丹羽文雄（1904～2005）が作詞した。作曲は、早稲田大学の応援歌「紺碧の空」や全国高校野球選手権大会の大会歌「栄冠は君に輝く」などで知られる古関裕而（1909～89）だ。

「ああ　勝利の星は／われに輝く／いざともに行かん／希望の門」などと高らかに歌う。

生徒手帳にも載っている。

昨夏の高校野球の四日市高応援席＝四日市市の霞ケ浦球場

高校野球4強入り契機

だが、週5日制で学校行事が短縮された影響もあるのか、20年以上、歌われてこなかったという。

復活のきっかけは、硬式野球部が昨夏、44年ぶりに三重大会で準決勝に進出したことだった。

課外授業のさなかだったが、生徒側から「応援に行きたい」と声が上がり、授業時間を短くすると、ほとんどの生徒が応援に参加。校歌を歌って団結した。

グラウンドの生徒も応援に支えられ、粘り強かった。明るく、楽しそうに応援する生徒たちの姿に、水谷明弘校長(58)は、代表として戦う者に共感する様子を見て取った。

「社会に出てからも、こうした活力が必要になる。校歌のほかに、応援歌もほしい」と意を強くしたという。

応援歌「希望の門」を録音した試作CDを手にする水谷明弘校長

同校には、主な応援歌が二つある。一つは、スクールカラーが緑色になった由来とされる「文にさときは」。ただ、「文にさときは武に強し／北勢四高の健男児／緑の旗をひるがえし／天下の覇権をとらんかな」という歌詞は「男子限定」（水谷校長）のようだった。

もう一つの「希望の門」は、鈴鹿市出身の歌人、佐佐木信綱（1872～1963）作詞の校歌にはない学校名の「四日市」も盛り込まれ、男女ともに歌える内容だ。

昨年8月、吹奏楽部と音楽部の生徒が「希望の門」を演奏・合唱し、校歌とともにCDに録音。12月下旬には1千人を超える全校生徒の前で披露され、大学入試センター試験を控えた3年生を激励した。

水谷校長は「将来に希望が持てず不安な時代だが、前向きに取り組む主体性を持ち、社会に貢献できる人材に育ってほしい。応援歌が一助になれば」と期待している。

（嶋田圭一郎）